



DVDブック

新形式通訳案内士試験二次口述対策



勝負！シリーズ

改訂版

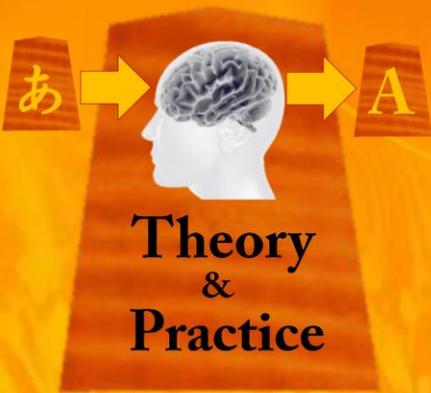
# 逐次通訳 七番勝負！

Japanese-English Consecutive Interpretation Exercises

## 通訳理論と実践演習

編著 杉森 元

Hajime Sugimori



今から私が日本語を  
読み上げますので、  
一分以内で英語に  
通訳してください！

よんしゅうびょう

通訳1分タイマー

00:40

よくわかる通訳理論書 & 演習用DVD！

史上初めて問われた「通訳」の対策を伝授

## まえがき

通訳案内士試験二次口述は、平成 25 年度よりその形式と内容が一新された。具体的には、①日英逐次通訳、②プレゼンテーション&質疑応答、の 2 つの課題が、合計約 10 分で行われるようになった。

本書で扱うのは①である。この課題は、90～100 字程度の日本語を試験官が読み上げ、受験者がこれを英語に通訳する、というものである。日本語の内容は、通訳案内に関するものであり、受験者は、原文の読み上げが終わった時点から 1 分以内に通訳を終わらなければならない、という要件が附されている。また、読上げを聞きながらメモを取ることは許されるが、読上げは一度きりであり、これを聞き直すことは許されない。

この課題を苦手とする方は多い。ここで問題なのは、通訳課題は多くの人にとって「一見、易しそうに思えて実は難しい課題」だ、ということである。なぜか。それは、数ある英語の資格試験で「通訳せよ」という課題が出されたのは、実質これが初めてであり、多くの人にとって「通訳」という言語活動は初体験だからである。

具体的にどこが難しいのかについては本文に譲るが、多くの人が壁に突き当たる最大の理由は、この「日英逐次通訳」のことを単純に「従前の和文英訳の口頭バージョン」と勘違いしてしまっていることである。前者が後者と異なるのは、前者には①「音声で行わなければならない」（音声要件）と②「即時に行わなければならない」（時間要件）という 2 つの要件があることである。このため、両者には別途の方法論が必要となる。

本書では、まず第 1 章「通訳理論編」において、この「通訳」という行為の本質を明らかにすることによって学習の目的を明確にし、具体的な練習方法を提示する。何をすればよいかは明確になったら、次は DVD 問題集を使って実践演習を行っていただきたい。

なお、もうお分かりだろうが、問題集が文字ではなく、DVD 動画で与えられているのには、ちゃんとした技術的理由がある。それは上述の「音声要件」と「時間要件」を満たす訓練をするためである。DVD 動画において問題が試験官役の出演者から口頭で与えられた後は、画面がタイマー

に切り替わり、本試験で求められる「1分」の時間をカウントする。そして、40秒と50秒の時点で「秒読み」が入り、1分がタイムアップになるとチャイムが鳴って終了し、最後に出題者が口頭で解答例を与える。

音声で経過時間を知らせるのは、通訳メモを見ながら訳す学習者の便宜のためである。この自動タイムキーパーは、独学者にとって重宝である。なぜなら、初心のうちにはタイムアウトすることが多く、タイムキーピングが必要だが、学習者が通訳をしながらタイムキーピングもするのは、本来通訳自体に向けるべき集中力がそがれるからである。

DVD 演習を終えたら、最後に第2章「スクリプト」に目を通して自分の訳を確認する。ここで大切なのは、DVD 演習前にスクリプトを見てはいけない、ということである。DVD の演習問題は予備知識なく「初見」で行わなければならない。なぜなら、本試験は全て「初見」であり、また前述のごとく、通訳においては「情報を聴き取る」(①音声要件)ことと「即時に訳す」(②時間要件)ことが最も重要であって、これを可能にするために高度の集中力を養うのが演習の主眼であるところ、予備知識があるとこれらが「ラクに」なってしまう(少ない集中力でも可能になってしまう)、訓練にならないからである。

本書で学習する通訳理論や技術は、単に新形式通訳案内士試験二次口述をパスするだけのテクニックではない。資格試験を突破した「その次」の段階へ進むにあたり大きな威力を発揮する。

通訳という行為にはプロのサービスとしての需要も多い。また「異言語異文化間を往復する」という行為を通じて、外国語だけでなく、母国語である日本語にも目覚め、言語センスが敏感になり、異文化間のコミュニケーションに習熟できる。さらに、多くの知識や人間関係を得るきっかけになるなど、通訳体験を通じて得られるものは多い。

通訳案内士試験突破を目指される方が本書を活用され、従前まで一部の人の独占物であった「通訳技術」を習得し、みごと最終合格の栄冠を勝ち取って、さらにはその先の自己実現に向けてスタートを切られることを期待する。

PEP 英語学校 校長 杉森 元

## 改訂版について

本 DVD ブック『逐次通訳七番勝負！』は、新コンセプトの通訳教材として、幸い好評を得ることができた。今回、さらに完璧を目指しての改訂にあたり、従前の第2章「スクリプト編」を改め、「スクリプト&ノート編」とした。これは、通訳ノートに関しては第1章で「ノートはグラフィックに書くべし」と述べたものを演習問題に即した具体的な形で読者にお見せするものである。

通訳ノートは、本来他人に見せることを予定したものではないので、通常の学習者にはあまりなじみのないものであろう。しかし、理論編で述べた通り、原語情報をグラフィックに「イメージ化する」ことは、通訳における最も重要なプロセスであり、この現れがノートであるので、具体的ノート例は、特に初心者にとって大いに参考になるであろう。

第2章のスクリプトで、英語表現を確認したら、次はノート例を見て、どのように原文の情報をビジュアルライズするかを研究していただきたい。さらに、ノート例を参考に、自分なりの「ノート」をもう一度書いてみていただきたい。もちろん、第1章通訳理論編で述べた通り、ノートの取り方は千差万別であり「正解」など存在しないのだから、そっくり真似をする必要などない。あくまで、理論編で述べた「グラフィックなノート」の具体例として参考にさせていただきだけで結構である。読者諸兄が今回の増補分を有効活用され、より楽しく効率的に通訳を学ばれることを期待する。

PEP 英語学校 校長 杉森 元

## 本書の使い方

本 DVD ブックは、このテキストと付属の DVD 問題集で構成されている。そして、テキストは通訳理論を解説した部分である第 1 章「通訳理論編」と、第 2 章「スクリプト編」から成っている。スクリプトには、DVD 問題集で出題される問題文及び解答例が記載されている。

利用方法としては、まず本テキスト中で、通訳理論を解説した第 1 章「通訳理論編」を一読する。こうして学習のターゲットを把握したら、すぐに DVD 問題集に取り組んでいただきたい。

問題演習のために準備するものは、DVD と再生機の他に、通訳メモを取るための筆記用具がある。本試験では、A 4 のコピー用紙 1 枚をクリップボードにはさみ、ボールペンを用いてメモをする、という方法に限定されているから、同じものを準備するのがよいであろう。

DVD 問題集では、まず本番と同様の「冒頭インストラクション」が与えられる。これはこれから行う試験のやり方等を説明するものである。続いて、問題となる日本語が出演者によって朗読される。朗読が終わると学習者は通訳を 1 分以内に終了しなければならない。動画画面は自動タイマーに切り替わり、タイムキーピングを行う。

時間についての試験上の要件としては（実務ではまた別だが）、1 分以内に終了できればよく、特にそれ以上急いで行う必要はない。ただ、最初のうちはタイムアウトすることが多いであろう。目安としては最初の「秒読み」が行われる 40 秒あたりまでに完了することを目指すといい。

なお、くれぐれも DVD 演習前には第 2 章「スクリプト編」を読まないようにし、予備知識なしで演習に臨むことを守っていただきたい。一般的理論部分は予習をするが、具体的な問題については「予習禁止」ということである。この趣旨については「まえがき」にて述べた通り、通訳において最も重要な、①音声から情報を聞き取る、②即時に訳す、の 2 つをトレーニングするためである。予備知識があると、学習者はそれに頼ってしまい、訓練にならないのである。

タイマーが1分経過をチャイムで知らせると、出演者が口頭で解答例を与えて「一局」(1問)が終了する。これが「番数」だけ繰り返される(『七番勝負』ならば7問が収録されている)。

学習者はDVDで演習を行うと、それぞれ自分の「課題」を見出すであろう。一般的に、通訳技術の習得過程における最大の課題は「原文情報の分析」「リテンション」などである(第1章「通訳理論編」で詳述する)が、やはり英語が外国語の者にとっては「原語で与えられた言葉に対応する英語の表現が不足している」という問題も無視できない。そこで、最後に第2章「スクリプト編」を参照し、表現法を確認・インプットする、という順番で学習を進めていただきたい。

#### ◆本教材の利用法まとめ

1. テキスト第1章「通訳理論編」を読む



2. DVD問題演習を行う

準備する物：①DVD再生機、②筆記用具



最初は  
スクリプトを  
見ざるで!



3. テキスト第2章「スクリプト&ノート編」を読んで確認する

<b>第1章 通訳理論編</b> .....	<b>1</b>
<b>通訳とは何か</b> .....	<b>2</b>
通訳はプロのサービス.....	2
意識すべし.....	3
通訳メカニズムと技術論.....	4
(1) 総論.....	4
(2) 聴くべし.....	4
(3) 憶えるべし.....	8
(a) リテンションの意義.....	8
(b) リテンションの対象は「意味」.....	9
(c) 意味とは「中立情報」のこと.....	10
(d) 中立情報とは「映像」「論理」「キーワード」など.....	11
(4) ノートテイキング.....	13
(a) メモ取りの意義.....	13
(b) 何を書き留めるか.....	14
(c) どう書き留めるか.....	14
(5) 訳して話す.....	16
<b>図解 通訳の仕組</b> .....	<b>19</b>
<b>具体的練習方法</b> .....	<b>20</b>
<b>第2章 スクリプト&amp;ノート編</b> .....	<b>23</b>
<b>第一局</b> .....	<b>24</b>
原文.....	24
情報構造分析.....	24
通訳例.....	25
英語表現.....	25
ノート例.....	26
<b>第二局</b> .....	<b>28</b>
原文.....	28

情報構造分析 .....	28
通訳例 .....	29
英語表現.....	29
ノート例 .....	30
<b>第三局 .....</b>	<b>32</b>
原文 .....	32
情報構造分析 .....	32
通訳例 .....	33
英語表現.....	33
ノート例 .....	34
<b>第四局 .....</b>	<b>36</b>
原文 .....	36
情報構造分析 .....	36
通訳例 .....	37
英語表現.....	37
ノート例 .....	38
<b>第五局 .....</b>	<b>40</b>
原文 .....	40
情報構造分析 .....	40
通訳例 .....	41
英語表現.....	41
ノート例 .....	42
<b>第六局 .....</b>	<b>44</b>
原文 .....	44
情報構造分析 .....	44
通訳例 .....	45
英語表現.....	45
ノート例 .....	46

<b>第七局</b> .....	<b>48</b>
原文 .....	48
情報構造分析 .....	48
通訳例 .....	49
英語表現.....	49
ノート例 .....	50
<b>最後に</b> .....	<b>52</b>

# 第1章

## 通訳理論編

学習者の方は、まず本章を読んで、学習の目的と方法をよく理解するようにしてください。

### 通訳とは何か

—できそうでできない通訳のひみつ—

### 図解 通訳の仕組

—これが通訳者の脳内だ—

### 具体的練習方法

—こうやればできる！—



## 通訳とは何か

### 通訳はプロのサービス

まえがきで述べたように、新形式の通訳案内士試験二次口述では「逐次通訳」が課される。日本には、英語の試験が多数あるが、この中で「通訳せよ」と要求される試験は従前ほぼ皆無であった。おかしな話だが、「通訳」案内士試験、と銘打った試験でさえも、実はこれまで「通訳」の技術が問われたことはなかった。つまり大多数の英語学習者にとって「通訳する」という言語活動は初体験なのである。そこで、受験者はまず「通訳するとは何をすることか」ということから確認する必要がある。

この問いに対しては、「そのぐらい知っている。言葉が通じない者の間を取り持って、片方の言うことをもう片方の言葉に訳してやる仕事のことだろう。外人のインタビューとか、国際会議とかでやっている。テレビでも見たことあるよ」という答が返ってくるであろう。しかし、ここで取り上げようとしているのはそのような表面的定義ではない。これまで「通訳を聞く」側であった人が、今回は主客転倒して日本の英語試験史上初めて「通訳をする」側に立とうとする際に「どのような点に気を付けてどのようなことをするべきか」という観点からこの問題を考えたいのである。

平均的な外国語学習者は当該外国語を学ぶ際、たいがい母国語へ、あるいは母国語から、「訳す」ということから始める。多くの方々は、これまで「英文和訳」と「和文英訳」をたくさんやってきたことであろう。これはこれで別に英語の学習方法としては間違っていない。

問題は、英語学習者が一定のレベルに達した後、今回のように「通訳せよ」という課題を与えられた際に、従前やってきた「自分の学習目的で訳す」という行為と「聞き手のために通訳する」という行為とを混同してしまい、「ああ、訳ならこれまでさんざんやってきたよ」と思い込んでしまうことである。そして、いざその「通訳」をやってみようとする、その難しさに愕然とする、ということになるのである。

両者は何が違うか。もちろん、技術論的にも大きく違うのだが（後述する）、学習に入る前に、心構えの問題として、両者の相違点をまずハッキリ

りさせておく必要がある。それは、「外国語学習目的の訳」は、初学者が「自分の理解のため」（外国語がわからないのは他人ではなく自分）あるいは、「先生に自分の語学力を試験において審査してもらうため」（自分よりも語学力が高い人に見せるため）に訳す行為であるのに対し、「通訳者としての訳」は、「お客さんである聞き手のため」（外国語がわからないのは他人であり、訳を示す相手は自分より語学力が低い人）に訳す行為である、ということである。

つまり、自分の学習目的での訳は、お金を払って学ばせてもらう学生としての行為であるのに対し、通訳者としての訳は、お金をもらって聞き手のために行うプロのサービスである、ということである。だから「通訳せよ」と言われたら、「学生」ではなく「プロ」の心構えを持つべきであり、発想の転換が必要なのである。

しかし、今回やろうとしていることは、通訳案内士「試験」の突破であるので、受験者には依然として「学生」としての身分もある。このように「通訳能力を試験される」ということは「もはや学生ではない、ということ」を学生として審査される」という矛盾した立場に立つことなので、ミスリーディングなのである。この点を十分意識し、たとえ試験といえども、受験者は通訳の本質に立つことを忘れないことが大切である。

## 意識すべし

初めてプロの通訳を聞くと「自分がこれまで学校や試験でやらされた厳密な訳に比べて、ずいぶんくだけた訳だなあ」という感想を持たれる方が多いであろう。そのとおり。和文英訳や英文和訳は直訳的な傾向があったが、これに対して通訳は意識的になる。これはなぜであろうか。

それは、先述のように、通訳の本質は「自己の語学力アピールのためではなく、外国語を解さない他人へのサービスために訳す」ことだからである。訳して「あげる」のだから、「意味」を訳してやらなければならない。当然である。

そしてこの「意識」は、訳す側の通訳者にとっても「通訳メカニズム」と一致していて好都合なのである。この「通訳メカニズム」とは、まえが

きで述べた「音声要件」（通訳は音声で行わなければならない）と「時間要件」（通訳は即時に行わなければならない）という必要性の中から生まれた「訳し方」のことである。

## 通訳メカニズムと技術論

### （１）総論

では、その「訳し方」とは具体的にどのような方法であるか。

通訳という行為のメカニズムは、通訳者が情報を「①聴解⇒②記憶⇒③翻訳⇒④表現」の順番で処理することである、と分析することができる。そして、この４段階の行為は、前段階が成立しないと、後続の段階が成立しない、という関係にある。たとえば、「聴解」（原情報の聴き取り）に失敗すれば、記憶する対象そのものが得られないわけだから、次の「記憶」という行為は不可能となる。聴解ができて、記憶に失敗して原情報を忘れてしまった場合は、訳す対象が失われてしまったのだから、次の段階である「翻訳」はやはり不可能である。

そうだとすれば、各行為は早い段階の行為ほど重要（④より③、③より②、②より①が大切）である、ということが言える。この点も、学習者にとってはミスリーディングな部分である。なぜなら、初心者（これまで通訳を「聞く側」であった人）は、「通訳」といえば④表現のことばかり見てきているので、「通訳をうまくやる」ためには、④あるいは③をうまくやるのが重要だと思いがちだからである。

しかし、実際にプロが大切に、かつ苦勞しているのは目に見えない①②の部分なのである。よって、これから「通訳をする」側になろうとする者は、いきなり③④をうまくやろうとするのではなく、まず①と②にフォーカスして訓練する必要があるのである。

### （２）聴くべし

すると、まず最も大切なのは①の「聴解」であるということになる。聴解とは音声で言語情報を受け取ることであり、先述の「音声要件」と深く関連している。通訳において、この聴解こそが最も大切で、最も難しいのである。

従前の「学習目的の訳」（学校や試験で行う英文和訳や和文英訳）においては、問題文（原情報）は、紙に文字で書かれて（視覚情報で）与えられるが、通訳の場合、原情報は音声で与えられる。両者の違いは、後者の情報処理の方が数段難しい、ということである。

なぜなら、書面は何度も見直すことができるのに対し、音声は一瞬で消えてしまうからである。また、書面では同音異義語を区別しやすいのに対し、音声ではこれが難しいので、情報の受領ミスが起りやすい。

では、どうすればよいか。それは「集中力」を増大させて臨むことである。これが唯一の方法である。「通訳をするときは集中して聴くべし」というのが、通訳の要諦である。

ただ、単に「話を取り違えないように注意して聴く」という行為は、日常生活でも我々は行っている。それだけで足りるのであれば、「通訳のための聴解」はそれほど難しくなく、ということになる。しかし実際は「通訳のための聴解」は非常に難しく、訓練なしに習得することはできない。なぜそれほど難しいのか。それは「通訳というのは、きわめて非日常的かつ不自然な言語活動であり、これを行うためには非日常的なまでに高い集中力を必要とする」からである。

通訳という行為が非日常的かつ不自然な言語活動であるとは、どういう意味か。ここで注意すべきは、「通訳をする」ということと「二か国語を使う」ということの差異である。前者は不自然な言語活動であるのに対し、後者は不自然ではない。両者はどこが異なるか。

通常、我々はどの言語を用いようと、その言語で自分の頭の中にある発想を表現する。しかし、通訳という行為は、自分の発想を表現するのではない。「他人の」発想を表現するのである。通訳者は、本来「自分の頭の中に存在しない情報」をアウトプットするのである。「心にもないこと」を言うのが通訳という行為なのである。

しかし、人間は自分の頭の中に存在しない情報を言語化することはできない。だから通訳をするためには、その情報を「まず頭に入れる」ことが大切なのである。先述した「通訳をするために最も大切なのは原情報の聴解である」というのは、このような意味である。

この場合の「頭に入れる」という行為は、単に「今聞いたことをリピートできる」というレベルでは足りない。なぜなら、通訳という行為では、まず聞き手として原話者の話を聴いた後、次の瞬間には自分が話者にならなければならない。つまり原話者と同じレベルまで内容を理解することが求められるのである。

このように、通訳目的で話を聴くときに必要な集中力は、原話者に「なる」レベルの理解を得られるだけの集中力である。しかも、通訳の場合は「時間要件」があるから、一瞬でこれを行わなければならない。このレベルの集中力をもって「聴く」という行為は、日常生活ではほぼ皆無である。なぜなら、「自分を押し殺して他人になる」という行為は普通の人にはしないからである。他人の意見を「代弁する」という言葉があるが、この行為でさえ、その代弁者の主観や意見が含まれることが通常である。それゆえ、「通訳目的で聴く」という非日常行為ができるようになるためには、意識的訓練が必要となる。

この「通訳目的で聴く」ときの集中力の度合は、具体的にどのくらいか。我々は、日常、言語を用いて情報をやりとしているから、「きく」行為も当然行っている。しかし、その「きく」という行為も、どのくらいの「集中力」をもって行うかは、場面によってさまざまである。たとえば、友達と雑談する際のことを考えてみよう。

我々は雑談する際にも相手の話を「きく」が、その際の集中力の度合はそれほど高くない。なぜなら、通常の会話というものは、「情報のキャッチボール」であるから、相手が一定の話を終えたら、それに対して「自分の考えを返す」ということをしなければならない。自分の考えはいつまとめるかという、それは相手の話を聞いている間にまとめる。すなわち、通常の会話において相手の話を「聞いて」いる間、聞き手は頭の中で半分は「この話に対して自分はどう反応しようか」ということを考えている。ひどい話だが、日常会話において、相手の話というのは半分しか聞いていないのが普通なのである。つまり日常「聞く」際の「集中力」は50%である。

リテンションであるが、情報を保持する方法としてはもう一つ「メモ」がある。通訳案内士試験でもメモ取りが許されている。そこで次に、このメモの本質について触れる。

#### (4) ノートテイキング

##### (a) メモ取りの意義

通訳の初心者に対して「今から私が言うことを通訳してください。メモを取っていただいても結構です」とまさにガイド試験と同じ課題を与え、その後で「どうでしたか」と感想を訊くと、必ず返ってくる答として「メモが追い付きません。こんなにたくさんを書くことはできません」というのがある。

しかし、この感想は実是的を外れている。与えた課題は「話を通訳せよ」であって「話を書き取れ」ではない。メモについては「取っていただいても結構です」と言ったのであるから、目的である「通訳」さえできれば、メモは別に取っても取らなくてもどちらでもよいわけである。

それなのに、なぜ初心者が「メモが取りきれない」という感想を漏らすかということ、それは学習者が「通訳をする手順としては、まず話を書き取って、そのメモを別の言語に訳すのだ」と誤解しているからである。これが間違っていることは明らかである。通訳がどのようなメカニズムでなされるかについては既に詳述した。聴解⇒記憶⇒翻訳⇒表現、というプロセスは脳の働きであって、紙とペンの働きではない。

通訳という行為は、コンピューターの情報処理に例えられる。通訳者が原情報を聴き取り、リテンションするのが脳というコンピューターへの「入力」(インプット)である。脳というコンピューターが、原情報を別の言語に変換するのが「処理」(プロセス)である。そして表現するのが「出力」(アウトプット)である。このように、訳すためには原情報を脳というプロセッサに入力する必要がある。紙の上にくら原情報を書き留めても、紙は「訳す」作業はできないのであるから、結局訳文を作ることにはできない。通訳において「ノートを取る」という行為の位置づけは、あくまで「記憶(リテンション)の補助」である。ノートを取ることにメ

リットがある場合だけ取り、リテンションだけで間に合う場合はメモを取る必要はない（メモなしで済みます場合も実際によくある）。

### **(b) 何を書き留めるか**

では、リテンションの補助をするためにノートを取るとして、どのような事項を書き留めればよいのか。

実は「補助のために書く」ものには2種類ある。1つめは、情報の種類により、頭で覚えるよりもメモに取ることの方が適切なものがあるので、それを書き留める、という場合である。2つめは、情報保持機能以外に、書くことによって通訳者自身の「理解」を助ける機能が期待できるものである。

前者を具体的に言うと、数字や固有名詞を書き留める、という場合がこれにあたる。数字や固有名詞は「その場限り」で「汎用性がない」情報であることが多く、覚えにくい、その一方、個々のスピーチにおいては重要な情報であることがしばしばである。たとえば、商談の通訳で数字の桁を間違えたら、冗談では済まない場合だってあり得る。また先述のように、数字や固有名詞は「原語と訳語が必ず1対1」の関係にある情報であるから、訳すためには、書き留めておきさえすれば、後は「知っている訳語をそのまま言うだけ」で訳になるので、無理して頭で覚えるよりも、書いてしまう方が合理的である。

後者は、話の筋や論理関係を書き取ることである。この場合は、矢印等の記号を多用することになる。たとえば、スピーチの中に「原因」と「結果」に相当する情報があった場合、「原因」から「結果」に向けて矢印を書くような場合である。通訳者は、原情報を聴解する際にこうした作業をすることにより、話の筋を追いかけ、自身の理解を助けることができる。また、通訳をデリバリーする際に、こうして作ったメモが記憶喚起及び訳文を作ること（日英通訳なら英語の構文を作ること）の助けとなる。

### **(c) どう書き留めるか**

以上は、メモに取る「対象」の話であるが、次にその「方法」はどのようなものか。

先述のように、通訳で最も重要で神経を使うのが「聴き取り」である。メモはまさにこの聴いている最中に取り取るものであるから、なるべく「聴き取り」のために払うべき注意力を削がないものにしたい、という要請がある。実際、通訳初心者の感想として「メモが追い付きません」に次いで多いのが「一生懸命メモを取っていたら、肝心のリテンションの方が真っ白になってしまい、話を完全に忘れてしまいました。しかも、思い出そうとして自分のメモを見ても、自分の文字が乱暴すぎて読めず、結局役に立ちませんでした（笑）」である。

通訳は脳で行うものであり、紙は訳してくれない。原情報はあくまで脳にインプット（リテンション）しなければならない、ということ、ここでもう一度確認しておきたい。あくまで情報保持のメインは脳におけるリテンションであり、メモはサブである。

また、メモについては、書く作業によって集中力を削がれないようにしたい、という要請の他に、音声は手の動きよりも速く流れるから、原情報に遅れずについていくために、なるべく速く書けるものにしたい、という要請もある。

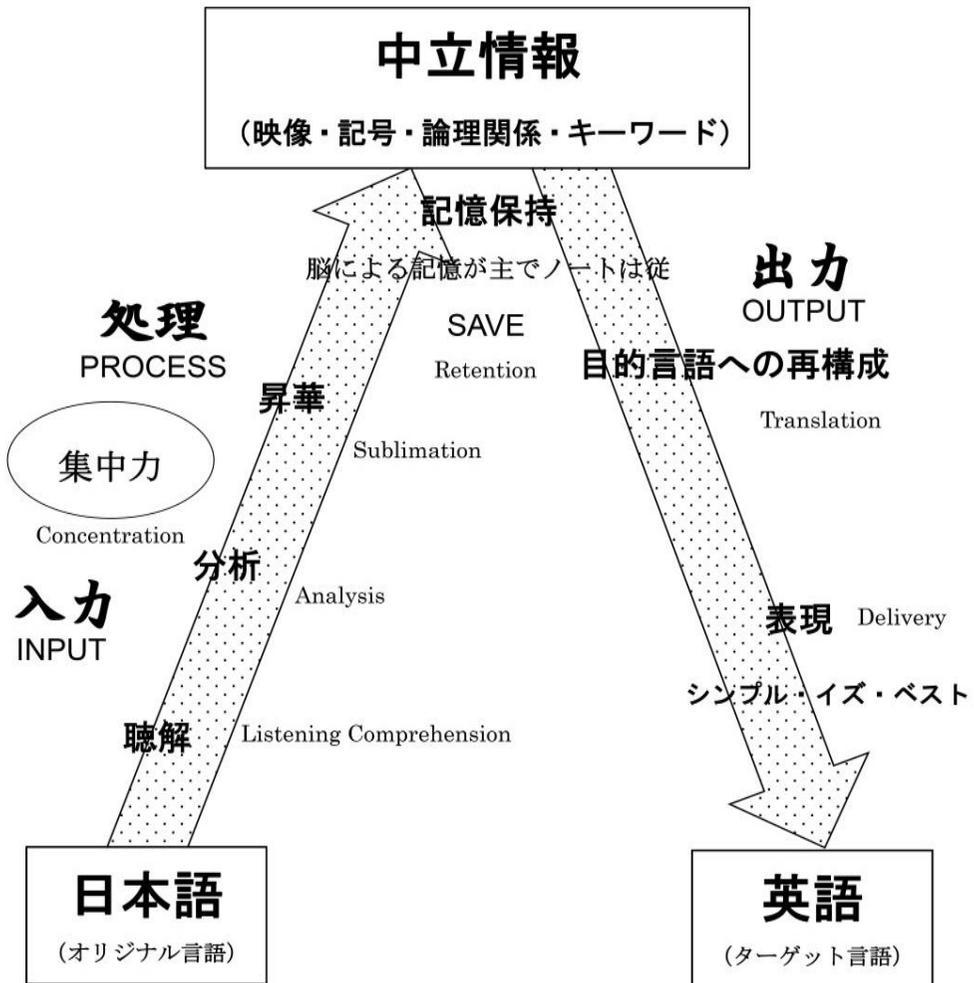
この2つの要請から導かれるのは「メモはグラフィックに書くべし」という答である。言語の「音声」を「文字」にして書くのではなく、原情報の「意味」を「絵」にして書くのである。なぜグラフィックなメモがよいか。理由は2つある。

まず1つめは、絵や記号は、文字よりも少ない画数で多くの情報を表せるからである。たとえば「絶対に拒絶する」という言葉を文字で書き取ると大変だが、記号で書くなら、バカでかい「X」を紙の真ん中に書きなぐっておけば足りる。つまり、絵や記号は文字よりも速く楽に書けるのである。

次に2つめは、グラフィックなメモは、リテンションのところで先述した「中立情報」と一致し、ここからは、通訳者の持っている複数の言語のうちいずれでも導き出せるからである。たとえば「X」からは、「絶対に拒絶する」も導けるし、“The answer is a flat no!”も導ける。つまり、文字を訳すよりも、絵を訳す方がやり易いのである。

図解  
通訳の仕組

日英通訳の場合



## 具体的練習方法

以上で、通訳という行為がどういう行為なのか、なぜ難しいのか、は明らかになったであろう。では、その通訳という行為ができるようになるためには、具体的にどのような練習をすればよいのかについて説明する。

どうすれば通訳ができるようになるか、という問いは、もしこの問いが既にある程度通訳ができる人によって発せられているのであれば、答えるのは大変難しい。しかし、ごく一般的な初心者から発せられているのであれば、それはそれほど難しくない。なぜなら、前述の通訳という行為の各段階のうち、初心者が困難を感じる部分というのは、ほぼ共通しているからである。

それは前頁の三角形の図の左半分、すなわち原文の聴き取りから三角形の頂点、すなわちリテンションまでのプロセスである。先述の通り、通訳で難しいのは「聴解・記憶」の部分であり、「翻訳・表現」の部分は、一般に思われているほどは難しくない。通訳の仕事は、リテンションが終われば、80%終了したといえる。よって、通訳ができるようになるためにはリテンションを練習すればよい。

ただ、その練習においては、原語の情報を聞いた後、「はい、憶えました（リテンションしました）」と言って終わってしまうと、本当に「通訳に必要なレベルでの」リテンションができていないか、が確認できない。そこで、行うのが「リプロダクション」という訓練法である。

リプロダクションとは、聴き取った原情報を「再現」することである。日本語で原情報を聞いたなら、その内容を日本語で再生することである。つまりリプロダクションとは、通訳プロセスの後半部分である「翻訳」の部分を省き、日本語の聴解⇒記憶⇒日本語で再生、という過程を経るものである。再生ができれば、リテンションができていたことが確認できたことになる。

ここで注意すべき点は、リプロダクションはリピートとは違う、ということである。リピートは、いわばテープレコーダーのように、音声としてインプットしたものを音声としてアウトプットすることである。これに対

# 第2章

## スクリプト&ノート編

本章はあくまで、DVD 問題集で実際に演習を行った後に確認の目的で読むようにしてください。通訳はあくまで音声を聴き取り、情報をリテンションする部分が最重要であって、通訳前に予備知識を得てしまつては、その部分の学習効果が半減するからです。



DVD 演習後に、本章の原文と訳を確認したら、次に「ノート例」を参考にして、ご自分なりのメモ法を研究してみてください。グラフィックなノートテイキングは、情報分析とリテンションの向上につながります。きっと得るところがあるでしょう。

# 箱根

## 原文

箱根は温泉町で、富士山の近くにあります。昔はここに大きな関所があり、江戸を防衛する役割を担っていました。ここは自然が豊かなので、現在ではハイキングを楽しむ人もたくさんいます。(87字)

## 情報構造分析

**第1文**：箱根は温泉町で、富士山の近くにあります。

⇒主題を一言で述べた「導入部分」である。このように「場所」の話をする場合には、最初に「大まかな地理的位置を与える」のは、よくあるパターンである。

**第2文**：昔はここに大きな関所があり、江戸を防衛する役割を担っていました。

⇒大まかな地理的場所を第1文で述べたのを受けて、具体的な説明に入っている。後半の「江戸を防衛する役割を担っていました」の主語は、「関所」であることに注意する。ポキャブラリーとして「関所」(checkpoint)が迷うかもしれない。

**第3文**：ここは自然が豊かなので、現在ではハイキングを楽しむ人もたくさんいます。

⇒前段と後段が「原因結果」という関係にある、という「論理構造」を把握する。論理構造は、第一には文章の「内容」から推測するが、形式的には「なので」というつなぎ言葉でわかる。

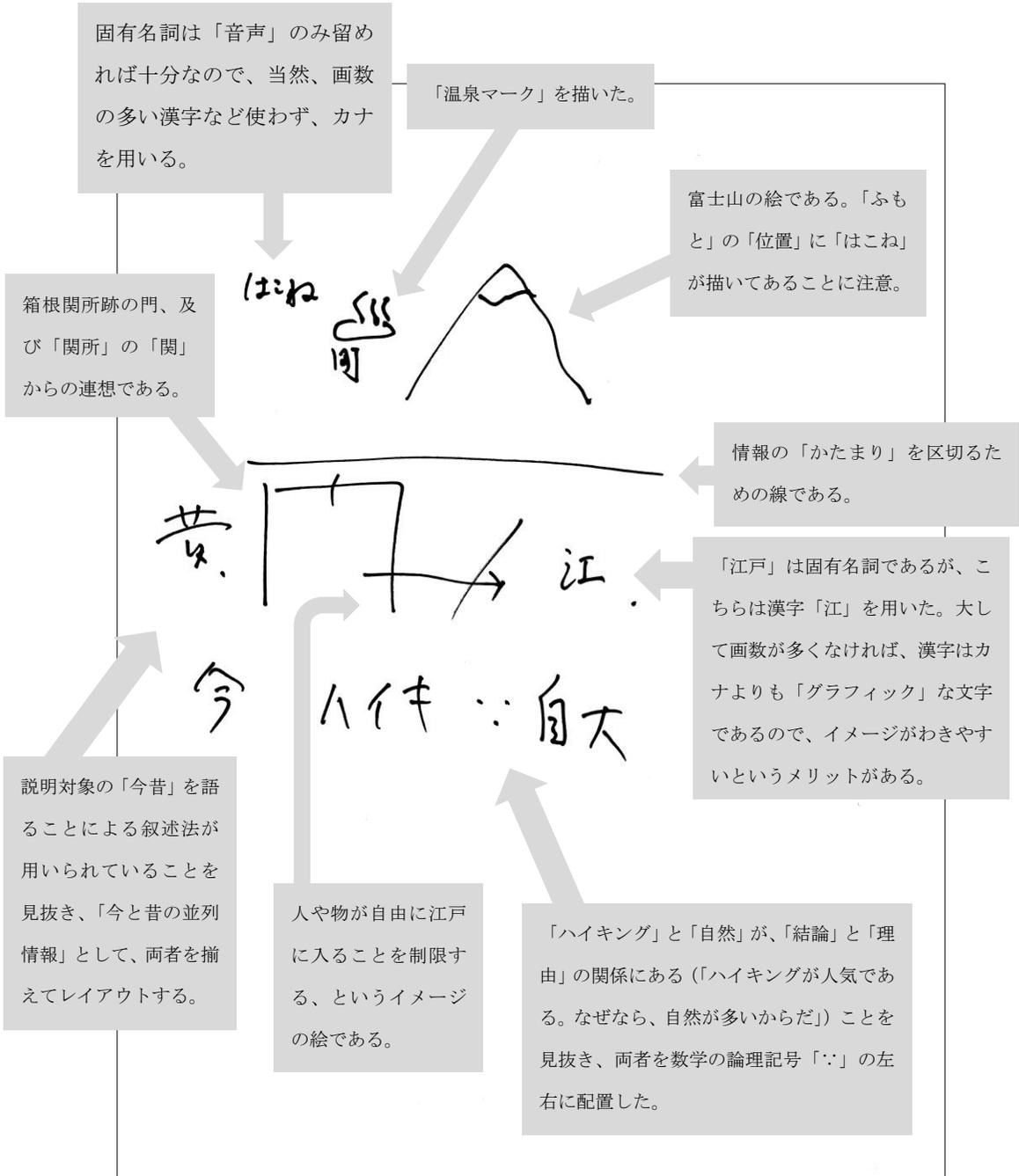
### 通訳例

Hakone is a hot spring town located near Mt. Fuji. This was the location of a major checkpoint that served to protect Edo, now Tokyo. Today, many people enjoy hiking in the rich nature of this area.

### 英語表現

- hot spring town 温泉町
- checkpoint 関所

## ノート例



◆この「ストーリー」をあなたならどう「描き」ますか？例を参考に、下に実際に自分なりのメモをもう一度書いてみましょう。

箱根は温泉町で、富士山の近くにあります。昔はここに大きな関所があり、江戸を防衛する役割を担っていました。ここは自然が豊かなので、現在ではハイキングを楽しむ人もたくさんいます。

# 最後に

## レッスン希望の方へ

逐次通訳番勝負！シリーズは、新形式の通訳案内士試験で問われるようになった「逐次通訳」を正式の理論に則り、独学で学べるように工夫した究極の教材です。

ただ、それでもやはり、通訳技術は一種の「職人芸」なので、そのマスターのためには個人レッスンを受けることが非常に有効です。

従前、通訳技術の教授はプロ志望の一部の人が行く通訳学校でしか行われていませんでした。しかし、PEP 英語学校では、無料テレビ電話 Skype を用いたレッスンにより、学習者の皆さんの時間的、地理的、経済的ハンディを最小化して、全ての人が通訳レッスンを受けることを可能にしています。

レッスンのスケジュールは、相談で都合の良い日時を決めることができます。ただ、毎年一次試験終了後、二次試験の直前までは混み合うことが多いので、早めの段階から受講しておくことをお勧めします。

レッスン担当は、元サイマル専属同時通訳者の杉森元です。詳細・受講申込についてはホームページをご覧ください。

## もっと練習したい方へ

逐次通訳番勝負！シリーズは、PEP 英語学校が開発したオリジナル教材で、本 DVD ブックの他にも『十番勝負』から『一番勝負』まで、たくさんの 문제가準備されています。

通訳が上達するには、理論やメソッドが正しいことがもちろん大切ですが、やはり絶対的な「練習量」の確保も必要です。しかし、通訳の練習ができる場は限られています。通訳案内士試験対策を行っている各種の学校の講座に参加するのは、経済的、時間的、地理的に負担が大きいことがしばしばであり、十分な練習量の確保は容易ではありません。

この点、PEPの教材を用いると、逐次通訳1問当たり200円程度で学習することができます。これなら、誰でもたっぷり練習することができます。ぜひご利用ください。サンプルがPEP英語学校ホームページのオンラインストアにあります。購入もここからできます。

## 合格の「次」を考えている方へ

まえがきにも書いた通り、通訳技術の学習は、単に通訳案内士試験に合格するためだけにやるものではありません。通訳ができるようになると、英語で仕事ができるようになります。また、通訳を通して多くの知識や人間関係を得ることができます。

日本で英語の勉強をする学習者にとって、通訳案内士試験に合格するのは、ひとつの目標です。しかし、資格試験合格は、ゴールではありません。実際、「プロの通訳者レベル」と言えるためには、通訳案内士試験の逐次通訳課題がこなせるだけでは、まだ足りません。この後習得すべき技術としては、同時通訳やサイトトランスレーションなどがあります。合格後は、ぜひ本格的な通訳技術の学習をしてみてください。

これらの技術の教授は、従前、プロ志望者だけが行く専門の学校でしか行われていませんでした。しかし、PEP英語学校は「楽しい学習による自己実現」の理念の下、必ずしもプロの通訳者志望者でなくても、全ての学習者が通訳技術を楽しく効率的に学ぶためのプログラムとして「会議通訳小教室」を準備しています。ご興味がある方は、どうぞホームページからお問い合わせください。



*Self-realization through Learning*

**PEP英語学校**  
*We are full of PEP!*

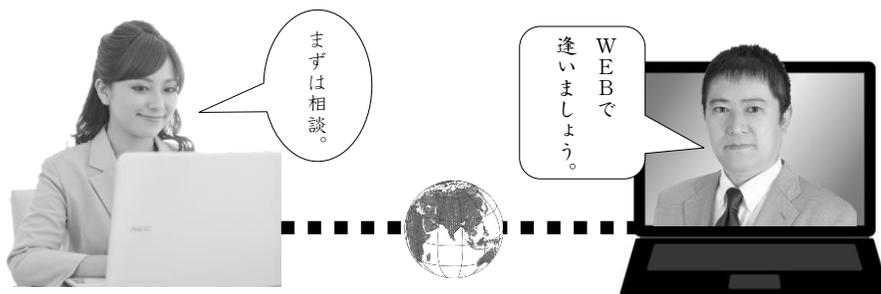
校長 杉森 元

# PEP英語学校の講座のご案内

## Skype 個人レッスン

いつでも、どこでも、誰でも、手軽に個人コーチが受けられる！

通訳案内士試験二次口述の逐次通訳、プレゼンテーション、その他英語学習一般まで、レッスン内容をあなただけのためにカスタマイズできます。



## 会議通訳小教室——資格の次は同時通訳！

PEP英語学校は、従前までは、一部の人の独占物であった同時通訳などの技術を一般の学習者にわかりやすく楽しくコーチします。資格試験の「次のステップ」を考える人に最適です。



## 〔著者紹介〕

杉森 元 Hajime Sugimori

福岡県出身。大学で歴史学を専攻し社会科教員免許を取得。大手塗料会社海外営業部勤務の後、通訳案内士試験予備校講師、英検 1 級講師、代々木ゼミナール英語科講師、駿台予備学校英語科講師など英語教育に従事。その後、サイマル・インターナショナル専属同時通訳者となり、サイマル・アカデミー通訳者養成コースの講師も担当した。現在、PEP 英語学校校長。通訳案内士試験準備講座と会議通訳小教室の講師を務める。「楽しい学習による自己実現」がモットー。通訳案内士試験関連著書に『モデル・プレゼンテーション集』『通訳案内士試験二次口述過去問詳解』『逐次通訳七番勝負！』『コンピューター・フレンドリー日本事象英単語帳』などがある。趣味は、クラシックギター、将棋、バードウォッチング、旅行など。



著者近影

## 逐次通訳七番勝負！（改訂版）

著者 杉森 元

発行者 PEP 英語学校

〒167-0023

東京都杉並区上井草 2-30-15 第二ケヤキビル 102 号

Tel: 03-5938-7777

HP: <http://www.pep-eigo.com>

Mail: [info@pep-eigo.com](mailto:info@pep-eigo.com)

乱丁・落丁はお取替えします。

ISBN978-4-9908244-9-5  
C1082 ¥2600E



 **PEP英語学校**  
*We are full of PEP!*

無断複製を厳禁します。

**「日英逐次通訳」は「和文英訳」とは違う！**  
**プロ作の最終兵器で新課題を撃破せよ！**